

アフリカ平和再建委員会 活動レポート 2005年1月

<http://www.arc-japan.org>



ルワンダ 子ども支援の報告と課題

1. ARCルワンダ奨学基金の開設から

ARCは2001年にルワンダ事務所を開設し、現地事情を更に把握するにつれ、1994年の虐殺以来まだ非常に多くの孤児がいること、虐殺で孤児になった子どもたち以外にも紛争やエイズ、貧困により更に孤児が生まれていることを確認しました。

また、1994年の虐殺で孤児になったと認定を受けた孤児は、ルワンダ虐殺生存者基金の恩恵によって、初等教育だけでなく中等教育も受けることが出来ますが、認定を受けられなかった孤児や、認定資格の無い孤児は、教育機会を奪われやすいだけでなく、遠縁の親戚や知人に引き取られ、実際には家政婦や召使として使われていたり、ひどい場合には家庭内で性的虐待を含む虐待を受けていることも有ります。これら家庭内の状況を調査することは非常に困難ですが、虐殺以降家庭内での性的虐待は増加していると言われています。また、虐殺の罪やその他の理由により親が刑務所に入っている子どもたちは、孤児ではありませんが、現実には孤児と同様の状況にあり、支援を必要としています。

このように、子どもたちの状況に非常に大きな格差が存在し、子どもの権利が脅かされているだけでなく、子どもたちが教育や技術を持たずに社会に出ることにより、まだ過去の紛争と虐殺の傷が残るルワンダに大きな社会不安をもたらします。このような子どもたちが、ストリートチルドレン、子ども売春、子ども兵士等になりやすいことは多く語られています。ルワンダが今後平和な社会を築いてゆくためには、ルワンダの将来を担う子どもたちの存在と尊厳、権利を、強い意思で守る必要があります。

この視野に基づき、ARCは2002年に奨学基金を開設し、賛同して下さった支援者の方々のお蔭で、キガリ市内の孤児院に養育されている孤児105名を初等教育に送ることが出来ました。



写真：高駐在員と孤児院の子どもたち
(ARCインターン分部真由美撮影)

2. ルワンダの子どもたちが直面する問題

今年4月にルワンダは1994年の虐殺から10年を迎えました。この紛争で殺された約80万人のうち約30万人が子どもで、約9万5千人の子どもたちが孤児になったと言われております。また、ほとんどの子どもたちが恐ろしい暴力の現場を目撃し、目前で家族を殺された子どもたちも多数います。多くの子どもたちが暴力とレイプの被害に合い、強制的に暴力の加害者にさせられ子どもたちも多く、これらの経験が彼らに与えたトラウマや影響は計り知れません。

また、虐殺とその前後の様々な出来事は、生き残った子どもたちの人生をことごとく変えてしまいました。両親を紛争で殺されたり、疫病、エイズ等で亡くしたり、また親が刑務所に入れられていたり、という事情で、多くの子どもたちが親類や知らない人に引き取られたり、孤児院に収容されました。年長の子どもたちで、自分が教育を受けることを諦め、自身も子どもでありながら年下の兄弟たちの面倒を見て、世帯主の役割を果たさなければならなくなった子どもたちもいます。収入を得ることが困難で売春に走る女子や、首都に出てきてストリートチルドレンになる子どもも少なくありません。

現在すでに成人している元孤児には、このように子ども時代と教育機会を逃し、今も教育に戻る機会を得ることが出来ず、わずかな収入を得て兄弟たち家族を支え続けている人がたくさんいます。

多くの年老いた祖父母も、孤児になった幼い孫たちの面倒を見る役目を担うことになりましたが、年老いて収入も少ない上、彼らが亡くなる時に、孫たちは本当に身寄りの無い孤児になってしまいます。そしてこの状況は、虐殺から10年を経た現在、エイズの感染によって更に繰り返されており、新しい孤児を作り出しています。

現在、ルワンダには約810,000人の孤児がいると推定され、うち約160,000人がエイズ孤児です。また、約100,000人の子どもが15,023の子ども世帯家庭で暮らしていると言われており、そのうち多数がキブエ県、キブンゴ県、ギタラマ県にいます(ルワンダ、ジェンダー省による数値。UNICEFの数値は42,000子ども世帯家庭に101,000人の子ども。)。約3,500人の子どもが孤児院で暮らしており、約7,000人のストリートチルドレンがいると言われています。他にも、暴力の加害者として拘留されている子どもや、親がエイズに感染しており数年のうちに孤児になる子どもたちもいます。



写真：高駐在員と孤児院の子どもたち
(ARCインターン分部真由美撮影)

ファクト・シート

- ・ルワンダの国民約 800 万人のうち、60%が 1 日 1 ドル以下で生活をする貧困層
- ・国連開発指標 175 カ国中、158 位
- ・半数以上の国民が 18 歳以下
- ・年間 4 万人がエイズに感染した母親から生まれる
- ・5 歳以下の幼児死亡率が非常に高く、5 人に一人の幼児が死亡する
- ・1 歳未満の乳幼児と 5 歳以下の幼児死亡は 29%がマラリアによる
- ・5 歳以下の幼児の 42%が栄養失調
- ・成人の 8.9%がエイズに感染
- ・15 歳から 24 歳の女性のうち 9 - 13.4%が、男性では 3.9 - 5.9%がエイズに感染
- ・2001 年までに 264,000 人の子どもが両親または片親をエイズで亡くし、全孤児のうち 43%がエイズ孤児。2010 年までに 350,000 人に増加すると予想。
- ・0 歳から 14 歳の子どものうち、613,000 人が孤児
- ・400,000 人以上の就学年齢児童が非就学
- ・1,000 人の子どもが法的紛争下にある
- ・60,000 人の子どもが肉体的障害を持っている
- ・120,000 人の子どもが就労
- ・300 人の乳幼児が母親と刑務所で暮らしている
- ・多くの子どもが軍事紛争に巻き込まれる（現在も 2,500 人がコンゴ民主共和国で武装）
- ・多くの子どもが性的虐待を受けた（統計無し）
- ・多くの子どもたちがエイズに感染（統計無し）

問題点とニーズ

【構造化の問題】

孤児院の孤児やストリートチルドレンの状況を固定化してしまうことの問題性も国際 NGO 等関係者から指摘されています。これは、孤児院やストリートチルドレン・センター等といった施設で育った子どもたちが、施設を出たときに社会性活に適應するのが困難になる可能性を危惧するものです。

【中等教育の重要性】

初等教育では基本的な読み書きが出来るようにはなりません。様々な問題を批判的な目で見て問題分析をしたり、解決方法を見つけ出すといった思考、分析能力、問題解決能力等が養われるわけではありません。また世界最貧国の一つとは言え小学校卒業程度で就職することは非常に困難です。結局召使、他人の農地を耕す、等で一ヶ月に 10 ドル程度のわずかな金額しか稼ぐことが出来ず、生活を営むことはほぼ不可能です。こうした貧困層はまた貧困層を生み出し、平和な社会構築の上で不安定な要因となることは明らかです。産業がほとんど無い、しかも内陸の小国であるルワンダが発展をとげ平和な社会を構築するには、競争力のある労働力を育成することが不可欠である、ということは誰もが認めるところで、ルワンダ政府もビジョン 2020 の中で明確に目標にあげています。また現地語のみでなく、公用語であるフランス語や英語の習得も世界的に競争力を持つ人材の育成は欠かせません。

【インフォーマル学校教育、職業訓練、収入創出】

孤児であれば尚更、教育や技術を持って経済的に自立をとげることは重要です。既に教育機会を逃した子どもも、インフォーマル学校教育を通して基礎教育を身に付け、更に職業訓練により技術を得て、収入を得ることが

出来るよう、支援することが必要です。また、身に付けた技術が収入につながるまでの間の支援も大変重要です。

【服役中の子ども】

未成年の服役囚が成人と同じ場所に拘留されていることが、人権団体等により指摘されていますが、未だ改善されていません。

【他にも以下のようなニーズがあります。】

- ・就学前教育支援（2 年間の就学前教育が義務化されていません、有料）
- ・初等教育支援（義務 6 年間、ただし有料）
- ・中等教育（6 年間、有料）
- ・保健衛生、栄養、環境に関する指導カウンセリング（トラウマ・カウンセリングも）
- ・社会福祉士（生活の相談、および監督）
- ・子どもの権利教育 / 平和共存教育

（報告：高 美穂）

子ども兵士 セミナーシリーズ



©下村靖樹リアルタイムプレス

10 月より、月 1 回行ってきた、「子ども兵士セミナー」ですが、3 回で 50 名ほどの方々に参加していただきました。10 月の第 1 回目は、ジャーナリスト・リアルタイムプレスの下村靖樹氏による「ウガンダの子ども兵士の実態」、11 月の第 2 回、テラ・ルネッサンス代表鬼丸昌也氏、「子ども兵士と小型武器」、第 3 回である 12 月は、北ウガンダ出身、元 People's Voice of Peace のポール・オケッタ氏に「子ども兵士と進まない Peace Process ~ 子どもたちの未来は? ~」として、ウガンダの子ども兵士の問題についてセミナーを行いました。

参加者の皆さんは、学生や一般の方が多く、ARC として少しでも子ども兵士について理解を深めていただくと嬉しく感じております。このセミナーは、「ストップ子ども兵士アクションキャンペーン」への先駆けとして行っております。

現在の子ども兵士の問題は、日本の社会においてはあまり重視されておらず、どこか他人ことのようにとられがちです。しかし、ARC が目指す「平和構築」とは切ることができない関係にあります。なぜなら、子どもたちは、次代の社会を担う者だからです。紛争を終結させるには子ども兵士を社会復帰させなくてはなりません。さらに、ただ社会復帰をさせるのではなく、子どもたちの受け皿となる社会も、そのような子どもたちを受け入れる準備をしていかななくてはなりません。現状では、子ども兵士は社会から拒否をされる傾向にあります。そのような状態では、平和を構築することはできるでしょうか。

そのような、子ども兵士が置かれている現状を、講師の方々の現地からの生の声を通じて理解していただくことのできる場として、このセミナーを参加者の皆さんに利用していただきたいと思います。

また、子ども兵士の「勉強会」を企画しております。勉強会のテーマは、皆様から子ども兵士に関する興味あるテーマを募

集めています。勉強会は、セミナーとは違い、参加して下さる方たちで作ってあげていこうと思っています。

第4回セミナー「DDRと子ども兵士～アフガニスタンとシエラレオネの事例から～」のお知らせ
講師：瀬谷ルミ子氏（在アフガニスタン日本大使館 DDR 担当二等書記官・元 ARC ルワンダ駐在員）
日時：2005年2月3日（木） 18:30～20:30
会場：地球環境パートナーシップオフィス エポ会議室
東京都渋谷区神宮前 5-53-67 コスモス青山 B2F

詳しいお問い合わせは、Eメールまたは、電話にて担当の入原までよろしくお願いたします。



テラ・ルネッサンス鬼丸昌也氏による子ども兵士セミナー

ストップ子ども兵士アクションキャンペーン

今年1月より、現代紛争の象徴と言われる「子ども兵士」、紛争の長期化する原因ともいわれる「子ども兵士」について、ただ「なくす」ことを目的とするのではなく、子ども兵士の完全な社会復帰と平和構築を目的とするキャンペーンを企画しています。

このキャンペーンの主な内容といたしまして：

- (1) 日本国内での関心喚起
- (2) 国際社会への提言
- (3) 直接支援

以上の3本柱で行っていかうと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

また、皆様に子ども兵士に関する企画などの情報を近いうちにご報告できればと考えております。

ストップ子ども兵士アクションキャンペーン ボランティア募集

一緒に活動し、キャンペーンを盛り上げてくださるボランティアの方を募集しております。

- **翻訳ボランティア** 本などの翻訳作業。(英語)
- **レポート・文献の選出ボランティア** 日本にはあまり子ども兵士に関する書籍がないため、ARCのWeb上で紹介ができる書籍・レポート・文献を検索、選出する作業(英語)
- **政策提言活動ボランティア** 提言活動のアプローチ、提言書の作成などをワーキンググループに加わり一緒に作業して下さる方。

経験があり興味のある方、経験はないが興味がある方。誰でも参加できます。よろしくお願いたします。

報告 「緑のサヘル・スーダン難民支援報告会」に参加して

スーダンのダルフルに置ける紛争により、隣国のチャドに20万人に近い難民が出ている。また、100万人以上が命を落とす危険があるといわれている。

6月より、UNHCRと提携で緑のサヘルは、チャドに逃げてきたスーダン難民の支援活動を行ってきた。その活動の内容は、家畜死骸処理、改良カマド普及、育苗・植林活動が主なものである。とても乾燥した地域ということもあり、難民キャンプに着く前に家畜が死んでしまい、そのまま放置されるため、病原体が発生する原因となるため早急な対応が必要だったようだ。また、改良カマドを普及させることで、いわゆる生活に必要な燃料の節約になる。ある難民キャンプでは、約60%改良カマドが普及した。



©緑のサヘル

また、キャンプの設置に関して協力NGOや難民、地域住民との三者間で軋轢が生じるという問題が起きたようである。摩擦が生じた原因の1つとして、環境、地域住民との交渉などを多角的に考えなかったことが挙げられる。例えば、今回の難民キャンプの設置において、「水の確保」を重視し過ぎてしまった為、薪など生活に必要な他の生活資材の確保をめぐる、地域住民との摩擦が起きたことがあった。

このような地域住民との摩擦は、当初から発生したわけではない。スーダンとチャドは、同じ民族が暮らし、また遊牧民であるため、難民流出以前より人的交流があった。難民流出当初は、国境付近の村民たちも自分たちの食事を分けるなど、スーダン難民を助けるような態度を示していたようだ。一方、大量の難民に対しては、当然そのような対応ができず、摩擦が広がっていったようである。

問題はそれだけではない。難民たちと協力NGOとの間でも、特にNGOの支援活動についての理解不足から衝突が起きた。例えば難民と緑のサヘルとの間で活動妨害が起こるなど、想像以上に過酷な状況での支援となった。特に育苗や植林活動は、その地域や環境整備の活動だったが、難民たちは一日も早いスーダンへの帰還を願っていた為、難民の定住計画と誤解されそのような事態になったようだ。

このような難民へのNGOやUNHCRの説明不足は、準備が十分にしないまま活動した為の結果が明確に表れているように思う。特にUNHCRの準備プロセスを見ると、早急に結果を求めるといった意思の基に設計されているのではないかと懐疑的にならざるを得ない。近年では、NGO現地活動員などの危機管理が特に重要視されていることから、プロジェクトをもう一度見直す必要があるのではないかと。

より具体的に説明すると、緑のサヘルとUNHCRでは、プロジェクトの進行スピードが違う。1週間後にはある程度の結果を求めるUNHCRに対し、緑のサヘルは、3年や4年といった長期のスパンで考えている。そのスタンスの違いから、特に下請け的な活動をしなくてはならないNGOは、活動を制約

され、不慣れな環境での事業の遂行は困難になる。もっとも、特に日本のNGO側も、大きな機関との提携協力活動に不慣れであったために、問題が起きたという可能性も否定できない。スタンスの違うNGOと機関が、相互の十分な話し合いと、部分的な歩み寄りが必要不可欠であることを学ばなくてはならないだろう。



©Office of U.S. Rep. Frank Wolf/Dan Scandling / http://allafrica.com/photoessay/darfur_wolftrip/photo10.html

今回、UNHCRは、緑のサヘルプロジェクトの進め方を理解しておらず、また、緑のサヘルも同様にミスをする事により、問題は起こった。そのため常に動く現実と、毎日のように移動してくるスーダン難民たちへの対応に支障をきたした。緑のサヘル支援活動は当初の目標の一部分しか実現できなかったように思うが、その制約の中で活動を行うことで多くの難民が助かり、未然に伝染病等を予防することができたことは、やはり、成果と考えたい。また、日本のNGOの存在も国際的に知らせることができる結果をもたらしたように思う。UNHCRも緑のサヘルも目的は同一、「人道支援」であるということ忘れてはならないと考える。(報告：入原 稚奈)

ARC 事務局ボランティア募集！！

業務内容

ホームページ管理

ウェブページの更新、ウェブを通じた広報や物品販売の拡大のための企画作りなど。

ルワンダ奨学基金

(1)入金票の整理、(2)帳簿記入(Excel)、(3)お礼状送付、(4)支援者と被支援者とのマッチングや送金等に関するルワンダ事務所との連絡等。

ルワンダ事業分析

現地から送られた資料に基づきデータを整理し、今後の事業展望検討のための資料作成等。

ファンドレイジング

色々な媒体を通じての資金集め。

勉強会、報告会

ルワンダ、アフリカをより深く知るための勉強会、またARC報告会の企画・運営。

バナナカード

ルワンダの女性たちが作ったバナナカードの袋詰め、在庫管理、販売、広報活動。

事務局雑務

ARC会員の皆様へのニュースレター発送作業等。

ARCよりお願い・・・。



ARCでは、ご家庭、事務所で不要となりました、机やイスを譲っていただきたいと思っております。また、ノートPC、コピー機や印刷機などの事務機器もございましたら、よろしくお願いたします！

問い合わせ：アフリカ平和再建委員会(ARC)事務局

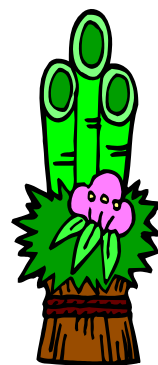
電話/FAX:03-3351-0892 Email: info@arc-japan.org

ARCより新年のご挨拶・・・

明けましておめでとうございます。

昨年中は、皆様には、大変お世話になりました。

本年も、ルワンダ事業、新規事業のストップ子ども兵士アクションキャンペーン共々、アフリカの平和構築のために努力してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



ルワンダの孤児院の子ども(撮影：小峯茂嗣)

アフリカ平和再建委員会

(Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN)

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-6-1四谷サンハイツ511

Tel/Fax: 03-3351-0892 E-mail: info@arc-japan.org

ホームページ <http://www.arc-japan.org>